

大分県下のキリシタン墓地

—石造墓碑と墓地遺跡を中心に—

別府大学 田 中 裕 介

1 はじめに 豊後におけるキリシタンの時代

日本の戦国時代から江戸時代初期にヨーロッパからキリスト教が伝わりました。一五四九年フランシスコ・ザビエルが鹿児島に渡来し、そのご一五五一年豊後府内にやってきました。これが豊後でのキリスト教布教のはじまりです。大内氏が滅亡し山口の教会が破壊された一五五六年から六二年までイエズス会の布教長トルレスは府内にあって、日本布教を指揮します。豊後府内の教会が孤児院や病院を併設して評判となるのはこのころです。府内は一躍日本布教の中心地となります。しかし庇護者であった大友義鎮が、改宗せずに禪宗に帰依して出家し宗麟となったため、豊後での布教は進みませんでした。

しかし一五七八年日向侵攻をまえに大友宗麟はキリスト教に改宗し、領国内で強力に改宗事業をおこないます。ちょうどそのころ来日したイエズス会巡察師アレックスサンドレ・ヴァリニャーノの後押しもあり、豊後では一五八七年まで府内教会（一五八〇）コレジオ併設）や臼杵教会（修練院併設）を中心に、日本布教の中心に位置づけられ、府内は司教座所在都市とされるのです。

ところが島津氏の豊後侵攻と一五八七年の豊臣秀吉による伴天連追放令の発布により、豊後から宣教師は退去し教会も放棄され、信仰を堅持した一部の有力武士や農民によって細々を維持される状態でした。その状況が変わるのは、秀吉がなくなり、徳川家康が政権を主導する一六〇〇年の関ヶ原の戦い以後でした。家康は追放令を堅持しますが、貿易の仲介者としての宣教師の活動を容認したため、布教は西日本の範囲をこえて、東国から蝦夷地まで広がります。そのため一六〇〇〜一六一四年の頃の江戸時代初期がキリスト教会の最盛期となるのです。

一六一四年幕府は禁教令を発し、一般信徒の信仰をも禁じます。一六三七年の島原・天草の乱以後弾圧は極めて厳しくなり、幕府はキリスト教を排除するために鎖国政策を徹底し

ます。こうして宣教師が不在となった国内では、信者は棄教するか、潜伏して信仰を堅持するか迫られ、信仰を続けた後者も一六六〇年代に豊後崩れと呼ばれる潜伏キリシタンの弾圧によって、豊後のキリスト教は消滅します。

このように一五四九年ザビエル来日から一六六〇年代の「崩れ」とよばれた潜伏キリシタンの露見までの一世紀は、キリシタンの世紀（C. R. ボクサー）と呼ばれるほど、日本にカトリック教会が信者を獲得した時代でした。

2 キリシタン文化の遺産

その時代実際にもちいられた遺物や遺構が奇跡的に残っています。遺跡としては教会跡、十字架建立地、墓地などです。信仰道具には聖画、ロザリオ、携帯十字架、鞭などがありますが、大半は一七世紀の弾圧時に破壊・遺棄・隠匿されてしまいました。皮肉なことにこの時代の最良のキリシタン遺物のコレクションは旧長崎奉行所の弾圧時代の没収品で、現在東京国立博物館に所蔵されています。例外的に伝世にしたのは潜伏キリシタンの遺品で、平戸・五島・外海・天草・茨木などが知られています。

しかしキリシタン遺物と呼ばれるものには明治時代に外国

人へのお土産として造られたものや二〇世紀になって模造されたものが数多く含まれてきました。現在キリシタン研究を物質的側面から研究している考古学、石造物研究、民俗学は、厳密な意味で確実な資料をもとに、キリシタンの世紀の遺物や遺跡を区別することが次第にできるようになりました。今回はその成果をもとにキリシタン時代の墓碑や墓地を紹介していきます

3 キリシタン墓地の調査と特徴

キリシタン時代の墓地が発見調査されるようになったのは最近の事です。とくに次の三つの遺跡が重要です。

A 高槻城キリシタン墓地 大阪府茨木市で一九九八年に調査されました。著名なキリシタン大名高山右近が、一五七〇年代に居城をかまえた場所で、教会推定地のそばで、二〇基以上のよく保存された木棺墓が発見されました。

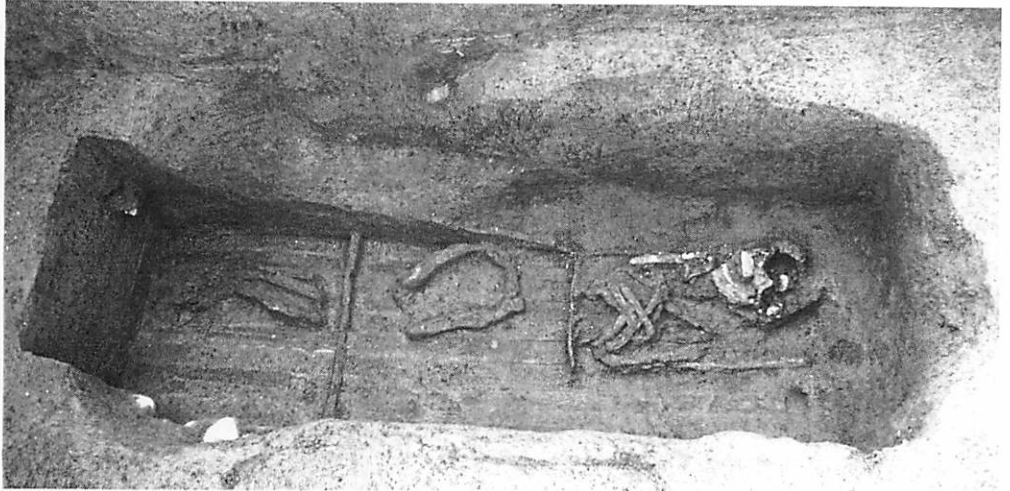
B 東京駅八重洲北口遺跡（墓地） 東京都千代田区で二〇〇一年は発見された墓地で、キリシタン信仰具を持った木棺墓や土壙墓が発掘されました。一六〇〇年前後の墓地と推定されています。

C 中世大友府内遺跡一〇次調査 大分市で二〇〇一年に

発見されたイエズス会府内教会の墓地で一六基の宗麟時代の埋葬が発見されています

これらの墓地は江戸時代の家族ごとの墓地とは全く異なる形式で作られていることがわかりました。家族ごとの墓地や累代墓ではなかったのです。カトリックの信仰に基づく墓地でした。その特徴を整理してみましょう。

① 埋葬施設は
② 伸展葬・仰向け・



中世大友府内遺跡 10次調査 1号墓

うつぶせなどの姿勢をとります。足を延ばして埋葬されるのです。②長方形木棺も用い鉄釘で結合します。③ときに板材の上に十字架を墨書しています。④通常は副葬品を持たないのですが、ときにメダイやロザリオなどの宗教具を身に付けて埋葬されることがあります。

墓地の構造は①木棺の側面方向に等間隔に埋葬する。その結果配列は列状になります。②その列内の埋葬は男女成人が混在している。③子供の埋葬は子供のみを列状に配する場合と、母子を接近して埋葬する場合があります。④墓地の周囲を溝あるいは柵で区画している。

このような埋葬の特徴がキリシタン墓地特有であることがわかってきました。

4 石造物Ⅱキリシタン墓碑の特徴

次にキリシタン墓地に使われていた墓碑を紹介します。墓地に比べて墓碑の研究は最初の発見が大正時代にさかのぼるため一世紀に近い研究の歴史があります。その中でも里程標となる三つの研究があります。その最初は一九二三年刊行の新村出・浜田耕作編『吉利支丹遺物の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告七）です。京都と大阪でキリシタン時

代の墓碑が発見されたものをまとめ「蒲鉾型」(半円柱形伏碑)と「板碑型」(立碑形)の二つの形式があり、そこには洗礼名・西暦年号と十字架表現が刻まれることを明らかにしました。二つめは長崎における片岡弥吉の調査で「長崎県下キリシタン墓碑総覧」「キリシタン研究」一として一九四二年に発表されました。長崎県で発見されたキリシタン墓碑を整理し、蒲鉾型のほかに関西にはない扁平な「伏碑型」(板状伏碑)のあることを明らかにしました。三つ目は二〇一二年に刊行された『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教委です。この中で大石一久と私はキリシタン墓碑の再分類と年代推定の基礎となる確実な資料の集成をおこない、森脇あけみ氏はキリシタン時代の十字架表現の集成と分類を行いました。

その結果全国の墓碑の種類をまとめたものが図1です。大分県内のキリシタン墓碑としては臼杵市搔懐キリシタン墓碑(大分県指定)と佐伯市宇目の重岡キリシタン墓碑が典型です。

特徴は①石造りのキリシタン墓碑は、面白いことに関西の方が出現が古く、仏教石造物を改造しています。②同時代の九州では石造墓碑の出現がおくれます。おそらく木造の十字架碑を利用していたのでしょう。③一七世紀の初めに長崎

で伏碑型の墓碑が出現し、関西まで広まっています。④関西では一六一三年、九州では大分で一六一九年、長崎で一六二二年まで実際の禁教が行われると造られなくなりま

す。墓碑の出現と盛衰はキリスト教布教の盛衰史とよく一致します。

5 臼杵市野津町 下藤遺跡の調査と「クルスバ」遺跡

ところで現在大分では下藤キリシタン墓地の調査が進行中です。その成果を最後に紹介します。下藤墓地では以前から「常珍」銘のある半円柱形柱状伏碑や、十字架碑の残片が採集されキリシタン墓地であることが想定されていました。発掘調査の成果は驚くべきものでした。当時の墓地の遺構がそのまま残っていたのです。新たな十字架碑の発見、数十基の墓と石組み遺構によるその地上施設の発見、礼拝堂の跡と推定される基礎遺構の発見があり、墓には長方形木棺が使われ、その配置は遠く離れた高槻城キリシタン墓地とそっくりでした。昨年、検地帳の調査から、さらにこの墓地が一五七九年に野津のリアンによって作られた墓地であることが明らかになりました。(フロイス『日本史』)。考古学上の遺跡と文献史料の内容が一致する稀有な史跡であることが判明したので

す。このような遺跡が西寒田クルスバ遺跡などさらに周辺に複数確認されています。

6 終わりに

大分のキリシタンはどうなったのでしょうか。最後に墓地調査からの感想を述べてみたいと思います。大分は一六六〇年代の豊後崩れによる弾圧によってキリシタンは壊滅したと考えられます。そこが潜伏キリシタンが許容された長崎や天草との違いです。そのため教会や十字架や墓地は破壊されたり、隠匿されました。江戸時代のキリシタン弾圧と類族制度（キリシタンの子孫を五世まで監視する制度）によって、生き残ったキリシタンの子孫は自らの祖先の記憶を消し去ったのです。おかげでその遺跡がよく残されていて、調査によって具体的姿が明らかになりつつあるというわけです。

二〇一五・五・一〇ニューライフプラザで行った別府史談会総会での講演をまとめたものです。史談会の皆様と友永植先生に感謝します。

第1図 日本における戦国時代から近世初期のキリスト教墓碑の基本分類

